
「夜の底」隠の王より

朝海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「夜の底」隠の王より

【Nコード】

N6242E

【作者名】

朝海

【あらすじ】

アニメ版の14話、アルヤ学園に来た壬晴と宵風だが、学園の生徒たちと戦闘中、宵風がついに撃たれてしまふ。そのあとのシーンです。壬晴視点です。

（前書き）

隠の王の14話「夜の底」を観たあと、宵風と壬晴の関係が切なくてたまらなくなり、書いたものです。うろ覚えな上に、脚色もあります。にわかファンのため、原作のイメージを壊す可能性がありますので、苦手な方はご遠慮ください。

冬の、しんと冴え渡る、月影のようなひとだった。初めて会ったときは、どこまでも透き通った、なんの感情も映さない瞳が、怖くて 目をそらすことすらできなかった。

「壬晴、壬晴……壬晴ッ……」

ガラス玉のような彼の瞳に、僕が泣きそうな顔をして映っていた。何事にも執着しないで、無関心を保っていた自分。いつからだっただろう。最初は取引でしかない関係だったのに、今ではこんなに……宵風を必要としている自分がいた。宵風の瞳から次々に透明な雫がこぼれ落ち、僕の指先を濡らす。初めて見る宵風の涙……怯え。哀しみ。後悔。あらゆる感情が、一度期に溢れ出して、皮肉にも今までで一番、生身の人間らしい彼がそこにあった。繰り返される僕の名前を耳にしながらも、何と返せばいいのかわからなかった。呆然とする僕に構うことなく、生暖かい赤い色が見る間に彼を彩っていた。ぞくり、と背筋が引きつった。

「ここにいるよ、ここにいるから……」

細く僕の頬に伸ばされた手。必死で彼の手に僕の手を重ねながら、やっと僕は喉の奥から忘れていた声を絞り出し、ともしびのように儚く揺らぐ宵風の生に追いつがった。

身勝手な僕のエゴだと思っていた。だって、彼はそれを望んでいなかったから。喉元までたびたび出かかった言葉を、伝えたことはなかった。この言葉をひとたび口にすれば、彼と築いてきた今までの関係が、変わってしまうと知っていたから。彼に軽蔑されたくなくて、失望されたくなくて、彼との繋がりを失いたくなくて、彼の願いを叶える存在であり続けようとした。彼が望むとおり、彼の存在を消す……彼にとってのただ一人の「死に神」でありたかった。

「死なないで、死なないでよ……死んじゃだよ、宵風、宵風……一緒に、いたいんだよ、宵風」

息をするのも苦しくて、うまく言えないのがもどかしい。今までずっと呑み込んできた言葉。この言葉を形にして、瞬間に受ける失望や軽蔑よりも、目前にある宵風というただ一人の存在を、失いたくなかった。つなぎとめたかった。滲む視界の中で、苦しそうな彼の表情に、ちらりと焦れたような光が差すのを見たような気がした。

「死にたくない……」

聞き間違いをしたのかと思ったくらいに、彼はひっそりと吐息に交えた呟きを落とした。同時に、僕の頬に添えられていただけの冷たい彼の掌に、ぐっと力がこもる。気が付けば、ほんの数センチすぐそばにまで、宵風の瞳が蒼く迫っていた。彼を縁取っていく死の影を、すぐ傍に感じた。

「死にたくない、死にたくない、……壬晴、壬晴、みはる……ッ」

消え入りそうに掠れながら、宵風が懸命に紡いだ言葉。切望と、狂おしいまでに繰り返される僕の名。消えたいと、ただそれだけを願いながら、自らの命を削っていた彼。そう遠くない日に、自らの命が尽きることを悟っていた彼が、今までいったいどんな思い出を持つことができたというのか。思い出を持てば持っただけ、死ぬことが怖くなる。だから、無関心でいるしかなかった。与えられる優しさを拒絶するしかなかった。何にも心を奪われることのないように彼と、僕の生き方は、とてもよく似ていた。宵風は、……もうひとりの僕の姿だ。

「……たすけて。ようせいさん……」

彼のために、彼のこの願いを叶えるために。彼の、初めてだろう生への執着。何をおいても。他の何を犠牲にしても。僕が、叶える。

「どこにいるの?! 今、君が必要なんだよ!! こたえてよ、ようせいさん!!」

私の叫びは、空しく宙にこだました。宵風を、助けて。宵風を連れて行かないで。森羅万象の力を、僕に使ってほしかったはずだ。それなら、今こそ、その力を。宵風の体を抱える腕にぐっと一層の力

をこめる。

「宵風を、たすけて……ッ！」

刹那、背中にびりつと痛みが走った。咄嗟に何が起きたのか、把握できないまま、ぐるりと首を巡らす。背後から冷然と僕たちを見下ろしていた瞳を見つめ返したところで、撃たれたことにやっと気付いた。いやだ、宵風を助きたいのに。宵風、宵風、宵風。……

「よい、て……」

僕の声は、彼にまで届いただろうか。意識が途切れる。宵風の顔がぼんやりとしてよく見えない。それでも腕に、掌に、指に、感じる彼の微かな体温を頼りに頬をすり寄せた。死なないで、宵風。死なないで。……

ぶつり、とテレビのスイッチを切るようだった。唐突に、目の前が真っ暗になり、後は何もわからなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6242e/>

「夜の底」隠の王より

2010年10月16日20時56分発行